

卒業研究における学生の「やる気」の要因 —グループ研究の場合—

若崎 淳子・長崎 雅子

概 要

本研究は、看護短大生を対象に、IGF法を活用した「やる気」調査をもとに、グループ形式で卒業研究に取り組む学生の「やる気」の要因を明らかにすることを目的とした。

卒業研究前期では、学生の「やる気」グラフは多峰型を示し、促進要因は、[卒業研究過程の理解]、[グループダイナミクス]、阻害要因は、[卒業研究過程のつまづき]、[グループダイナミクス]、[身体コンディション不良]であった。

中期では、グラフは直線型を示し、促進要因は、[前向きな取り組み]、阻害要因は、[関心の転化]、[身体コンディション不良]であった。

後期では、グラフはサイン・コサイン型を示した。特徴的な促進要因は見出せなかった。阻害要因は、[身体コンディション不良]であった。

キーワード：やる気の要因，卒業研究指導，看護学生，グループ研究

はじめに

「やる気」とは、「物事をやり遂げようとする積極的な気持ち」¹⁾と定義される、極めて主観的な意欲を指すものである。この「やる気」という言葉は、教育の現場においてもよく用いられ²⁻⁷⁾、主体的な学習を支える基盤になる。

本学においては、卒業研究は統合教育分野として3年間の学習の総まとめに位置付けられており、学習過程における学生の主体的な取り組みが期待される。

先行研究では、臨地実習における学生の「やる気」⁸⁻¹⁰⁾や看護学生の学習意欲¹¹⁾に関する報告は数多く見られるが、看護系短期大学生を対象に卒業研究過程における学生の主観的な「やる気」の変化を調査したものは見当たらない。そこで、筆者らは、一昨年度より、石桁氏らの開発した「やる気」の調査方法であるIGF法 (Inner Graphic Formura Method)¹²⁾を活用し、

卒業研究過程における学生の「やる気」の変化と「やる気」に影響する要因を明らかにし、効果的な指導方法を探索することを目的に、研究に取り組んできた。そして、本学紀要第6巻において、学生への調査と教員の観察から、卒業研究における学生の「やる気」の要因を研究対象者毎に分析し、結果を報告した¹³⁾。

今回、前回研究の課題を踏まえ、データの信頼性を高めるために学生の「やる気」の測定時期を検討し、また、客観的観察では把握しにくい学生の「やる気」に影響した潜在的な要因を掴むために、要因について自由記載法に変更した。そして、グループ形式で卒業研究に臨む学生の「やる気」の変化とそれに影響した要因を明らかにし、学生の「やる気」を考慮した指導の手がかりをつかむことを目的として研究に取り組んだ結果、グループ形式で卒業研究を学ぶ学生への指導に役立つ基礎的資料を得たので報告する。

I. 目 的

グループ形式での卒業研究における学生の「やる気」の変化とそれに影響した要因を明らかにし、卒業研究指導への手がかりをつかむ。

II. 方 法

1. 対象

S看護短期大学看護学科3年次生5名。

2. データ

石桁氏らの開発したIGF法で活用される「やる気調査用紙」¹⁴⁾をもとに作成した、「やる気」調査票の記載内容。

本研究における調査票は、①パーセントで表わした、その日の卒業研究終了時点の「やる気」度、②「やる気」を起こした要因（以下、促進要因とする。）、③「やる気」をなくした要因（以下、阻害要因とする。）、④卒業研究進捗、⑤実習サイクル、で構成した（図1参照）。本研究における「やる気」度の基準は、S看護短期大学に入学後、自己のやる気が最大であった時を100%、自己のやる気が最低であった時を0%とした。

卒業研究日	
卒業研究進捗	
実習サイクル	
やる気度(%)	100 90 80 70 60 50 40 30 20 10 0
促進要因	
阻害要因	

図1 「やる気」の調査票

尚、IGF法とは、「やる気」を実際的で主観的に調査する方法であり、「やる気」がグラフによって表現される点の特徴である¹⁵⁾。グラフ図では、横軸は時間経過が、縦軸はパーセントで示されたその時点の「やる気」度が、表示される。

3. データ収集期間

平成13年4月18日～平成13年12月5日。

4. データ収集方法

毎時間の授業終了後に調査票を配布、即時記入後、提出を求めた。

5. データ分析方法

- 1) 調査票の記述内容：調査票の促進要因、阻害要因に記述された内容は、要因毎に分析した。1センテンスを分析単位とし、1データとした。データを表現、意味内容の類似性・相違性により分離・結合しサブカテゴリー化した。それを内容の性質で結合しカテゴリー化した。以上のプロセスを3回、2名の研究者の意見が一致するまで繰り返し検討し、信頼性を高めた。
- 2) 「やる気」グラフ：曲線カーブを描き、その推移を明らかにした。
- 3) 「やる気」グラフと「やる気」を促進あるいは阻害した要因を検討した。

6. 科目概要

卒業研究は、教養・基礎教育と看護専門教育を統合する分野に位置付けられ、3年次必修2単位の通年科目である。授業のねらいは、看護実践における研究的態度を養い、研究の必要性、目的、方法論を学習することで、変化する社会状況の中での的確に問題解決する能力を養うことである。授業形態は、学生は、個人形式かグループ形式のどちらかを選択し、一連の研究過程を踏み、卒業研究集録として紙上发表する。

本研究対象である学生5名は、グループ形式で卒業研究に取り組み、2名の教員が指導した。学生の卒業研究テーマは、看護場面における人間関係形成に関するものであった。

7. 倫理的配慮

科目開始日に、研究の主旨と具体的方法を口頭で説明、不明な点については質問を受けた。また、学習評価には無関係であること、調査への協力は自由意志に基づき、本研究に協力しない場合でも学習や授業中受ける指導内容に不都合が生じることはないこと、研究承諾後であっても対象者の意思を尊重し、申し出によりいつでも研究協力を中止できることを十分に口頭で説明した。さらに、データは本研究目的以外で使用しないこと、データ収集、データ分析は個人を特定できない方法で行なうこと、データの集計や分析は科目終了後に行なうこと、研究結果は看護系学会にて口演発表すること、研究論文として公表することを説明した。そして研究全過程において対象者のプライバシーを厳守し、研究発表、研究論文においても個人を特定し得るような方法で提示しないことを確約する旨、話した。その上で、個別に口頭で本研究への協力の承諾を得た。

表1 学生の「やる気」の促進要因

カテゴリー	データ数	%	サブカテゴリー	データ数
データ数 %		n=139		
①卒業研究過程の理解	33	23.7	研究内容の具体的検討	9
			効果的な意見交換	7
			研究過程の見通しがつく	7
			論文執筆の開始	4
			文献検索への興味・関心	3
			記録の必要性の理解	3
②前向きな取り組み	23	16.5	卒業研究を進めたい	10
			事前の自己学習	4
			卒業研究への期待	3
			論文の質を上げたい	3
			パソコンの活用がおもしろい	2
			対象理解を深めたい	1
③環境	22	15.8	天候が良い	17
			室温の寒暖	4
			空間が広い	1
④コンディション	17	12.2	体力的ゆとり	9
			精神的ゆとり	8
⑤グループダイナミクス	14	10.1	本音の表出	5
			役割に対する責任感	4
			孤立への不安	2
			場の雰囲気	2
			苛立ち	1
⑥卒業研究内容の理解	9	6.5	自分のすべきことへの理解	5
			活用する理論の理解	2
			自分達の研究の方向性の理解	2
⑦臨地実習	9	6.5	実習のインターバル期間	7
			インターバルにて精神的なゆとり	2
⑧教員の指導・助言	7	5	具体的なアドバイス	3
			改善点の指導	3
			理論の説明	1
⑨焦り	5	3.6	研究に対する焦り	5

8. 用語の定義

「やる気」；積極的に卒業研究に取り組もうと思う気持ち。

III. 結果

1. 学生の「やる気」を左右する要因

調査票からデータとした総センテンス数は、促進要因が139、阻害要因が196であった。一人当たりの平均センテンス数は、促進要因が27.8、阻害要因が39.2であった。

両要因とも9のカテゴリーと31のサブカテゴリーに分類できた。促進要因、阻害要因について、カテゴリー別にデータ数の割合を単純集計し、サブカテゴリーと共に、データ数の多い順に、表1、表2に示した。以下、本文中の[]はカテゴリー名を、{|}はサブカテゴリー名を、<>は学生の記述内容そのものを表す。

1) 「やる気」の促進要因

促進要因は多い順に、[卒業研究過程の理解]、

表2 学生の「やる気」の阻害要因

カテゴリー	データ数	%	サブカテゴリー	データ数
データ数 %		n=196		
①身体コンディション不良	52	26.5	睡眠不足	33
			体調不調	13
			疲労	4
			空腹	2
②卒業研究過程のつまずき	28	14.3	見通しがつかない	9
			進み具合が悪い	9
			理解困難	6
			わからず混乱	4
③関心の転化	24	12.2	他の科目が気になる	10
			進路が気になる	7
			時間的に忙しい	6
			身内の不幸	1
④臨地実習	24	12.2	実習疲れ	14
			実習記録に追われる	10
⑤グループダイナミクス	19	9.7	場の雰囲気	5
			自己の準備不足	5
			ディスカッション	3
			他者の態度	3
			時間の活用	3
⑥環境	18	9.2	室温の寒暖	10
			雨降り	6
			席が窮屈	2
⑦気分がのらない	16	8.2	憂鬱	7
			頭が働かない	6
			面倒臭い	2
			気分転換したい	1
⑧取り組みの停滞	11	5.6	自信喪失感	6
			気落ち	3
			行き詰まり	2
⑨パソコンの活用	4	2	フロッピーディスク破損	2
			操作が難しい	2

[前向きな取り組み], [環境], [コンディション], [グループダイナミクス], [卒業研究内容の理解], [臨地実習], [教員の指導・助言], [焦り]であった(表1参照)。

促進要因の全データの23.7%を占め、最多であった[卒業研究過程の理解]は、{文献検索への興味・関心}, {研究内容の具体的検討}, {研究過程の見通しがつく}, {論文執筆}, {効果的な意見交換}, {記録の必要性の理解}の6サブカテゴリーで構成された。

また、個人形式と対比しグループ形式で取り組む卒業研究に特徴的ともいえる[グループダイナミクス]では、5サブカテゴリーに分類された。その内容は、{役割に対する責任感}, {場の雰囲気}, {本音の表出}といったグループワークを推し進めていく上で必要な肯定的側面と共に、{孤立への不安}, {苛立ち}といった否定的側面も表出されていた。この[グループダイナミクス]と[卒業研究過程の理解]は、4月から6月に多く見られた。

[卒業研究内容の理解]は、{自分のすべきことへの理解}, {活用する理論の理解}, {自分達の研究の方向性の理解}の3サブカテゴリーから成り、その多くは、卒業研究前半期にあたる4月から7月に見られた。

[前向きな取り組み]は、全体の16.5%を占め、6サブカテゴリーから成った。その内容は、{卒業研究への期待}, {卒業研究を進めたい}, {論文の質を上げたい}等であり、7月、8月、10月、11月に集中して現れていた。

[コンディション]では、{体力的ゆとり}と{精神的ゆとり}の2サブカテゴリーに分類され、学生の「やる気」と体調との関連が示唆された。4月、10月前半、11月に多く見られた。

[環境]は、{天候が良い}, {室温の寒暖}, {空間が広い}の3サブカテゴリーから成り、学習空間の物理的快適性に関する内容であった。これらは、8月、9月と、11月下旬以降に現れていた。

[臨地実習]は、2サブカテゴリーに分類され、{実習のインターバル期間}である7月、{インターバルにて精神的なゆとり}のあった9月下旬に見られた。

卒業研究指導を担当する[教員の指導・助言]が占める割合は、促進要因のわずか5%に過ぎなかった。{具体的なアドバイス}, {改善点の指導}, {理論の説明}の3サブカテゴリーに分類され、11月以降に見られていた。

さらに、<今月最後の研究になるから焦っている>、<締切が近い>といった[焦り]は、ここでは、「やる気」の促進要因として記述され、8月下旬と12月に挙がっていた。

2) 「やる気」の阻害要因

阻害要因は多い順に、[身体コンディション不良], [卒業研究過程のつまずき], [関心の転化], [臨地実習], [グループダイナミクス], [環境], [気分がのらない], [取り組みの停滞], [パソコンの活用]であった。(表2参照)

阻害要因の全データの26.5%を占め、最多であった[身体コンディション不良]は、{睡眠不足}, {体調不調}, {疲労}, {空腹}の4サブカテゴリーに分類された。この[身体コンディション不良]は、通年(4~12月)に渡り見られていた。

[卒業研究過程のつまずき]は、4月から6月に多く見られていた。サブカテゴリーは、{見通しがつかない}, {進み具合が悪い}, {理解困難}, {わからず混乱}の4つであった。その内容には、{見通しがつかない}では<研究方法の具体化ができていない>が、{進み具合が悪い}では<研究が進んでいるのかわからない>が、{理解困難}では<理論を理解するのは難しい>が、{わからず混乱}では<自分が何を研究したいのか、わからなくなった>、<分析が思うように進まず、わからなかった>などが記述されていた。

[関心の転化]では、{身内の不幸}のように、私的な要因が1データあった。しかし、大半は、{他の科目が気になる}や{進路が気になる}といった看護短期大学3年次に起因する内容であった。[関心の転化]は、6月以降に現れていた。

[臨地実習]は、2サブカテゴリーに分類でき、そのうち、{実習疲れ}では、<実習連続4週目突入、来週は5週目でしんどいです>のように、率直に実習による疲れを挙げる記述が目立った。

[臨地実習]は、7月、8月を除く各月に見られた。

[グループダイナミクス]では、5サブカテゴリーに分類できた。{自己の準備不足}のまま卒業研究に臨んでいたり、{ディスカッション}や{時間の活用}がうまくいかなかったりするなど、学生5人の足並みが揃わないことが伺えた。また、<部屋の空気が重かった>や<何か、まだプレッシャーみたいなものを感じる>のように、心地良くないその{場の雰囲気}を肌で感じ取ったり、グループ内の一部の学生の<やる気のなさを見た時>や<受身的>といった{他者の態度}が、他の学生の「やる気」に影響を及ぼしていた。[グループダイナミクス]は、5～7月、11月に現れていた。

さらに{憂鬱}、{気落ち}、{自信喪失感}といった情緒的な要因、快適さに欠ける[環境]的要因、[パソコンの活用]といった情報処理操作に伴う能力が、学生の「やる気」を阻害する要因として抽出された。

また、表1、表2によると、「やる気」の促進、阻害の双方に共通した要因には、[卒業研究過程]、[臨地実習]、[グループダイナミクス]、[環境]、[取り組み]、[コンディション]の6カテゴリーがあった。

2. 「やる気」グラフからみた、学生の「やる気」度の変化

4月から12月までの卒業研究における5名の学生の「やる気」度の推移をグラフに表わし、卒業研究日、卒業研究進度、実習サイクル、促進要因、阻害要因と共に、図2に示した。「やる気」は主観的なものであるため、5名の学生の「やる気」グラフは、各々異なっていた。

また、図2で、5名のグラフを3ヶ月単位の時間軸の変化で見つめ、石術氏の述べる「直感的に分類したタイプ」¹⁶⁾に倣ってグラフの型を表現してみると、卒業研究前期の4～6月は、いずれの学生も「やる気」度の高低が大きく、多峰型であった。中期の7～9月は、高低が小さく、直線型であった。後期の3ヶ月は、Sin(サイン)型、Cos(コサイン)型であった。

また、全期間を通しての学生の「やる気」度の平均は、54.7%であった。

IV. 考 察

ここでは、学生の「やる気」の変化を時間軸で、3ヶ月単位の前期、中期、後期に分け、各期の要因と指導の手かがりの視点から考察を述べる。

1. 卒業研究前期の学生の「やる気」の変化と要因

卒業研究前期の4～6月は、「やる気」グラフは、「やる気」度の高低が大きく、多峰型であった。

卒業研究進度と促進要因との関係からは、[卒業研究過程の理解]と[グループダイナミクス]は、4～6月に集中していることがわかる。また一方、卒業研究進度と阻害要因との関係では、[身体コンディション不良]、[臨地実習]に、[卒業研究過程のつまずき]、[グループダイナミクス]が続いている。これらのことから、前期では、卒業研究過程の理解度やグループ内の力動関係が学生の「やる気」に影響を与えることが伺える。

学生達の[卒業研究過程のつまずき]の記述内容からは、教員から説明を受けても、その説明で用いられた用語について、<言葉が難しい>と感じ、意味の{理解に困難}を示したり、{文献検索への興味・関心}はあるものの、<資料を探していて自分のしたいことがわからなくなった>と、{文献検索で混乱}したことを表出していた。また、<専門的な研究方法がよくわからなかった>、<研究の方向性がわからなかった>といった{見通しがつかない}ことを、「やる気」を阻害する要因として指摘していた。長崎が、学生達は臨地実習において問題解決法を用いた科学的思考を看護過程として展開しているが、研究は初めての体験であり研究の概念や方法についての戸惑いが大きい¹⁷⁾、と述べているように、研究への戸惑いが学生の「やる気」の不安定さに影響したものと考えられる。

また、[グループダイナミクス]では、促進要因の記述には、<少し言いたいことを言えるようになった>、<今日の授業の最後に話し合

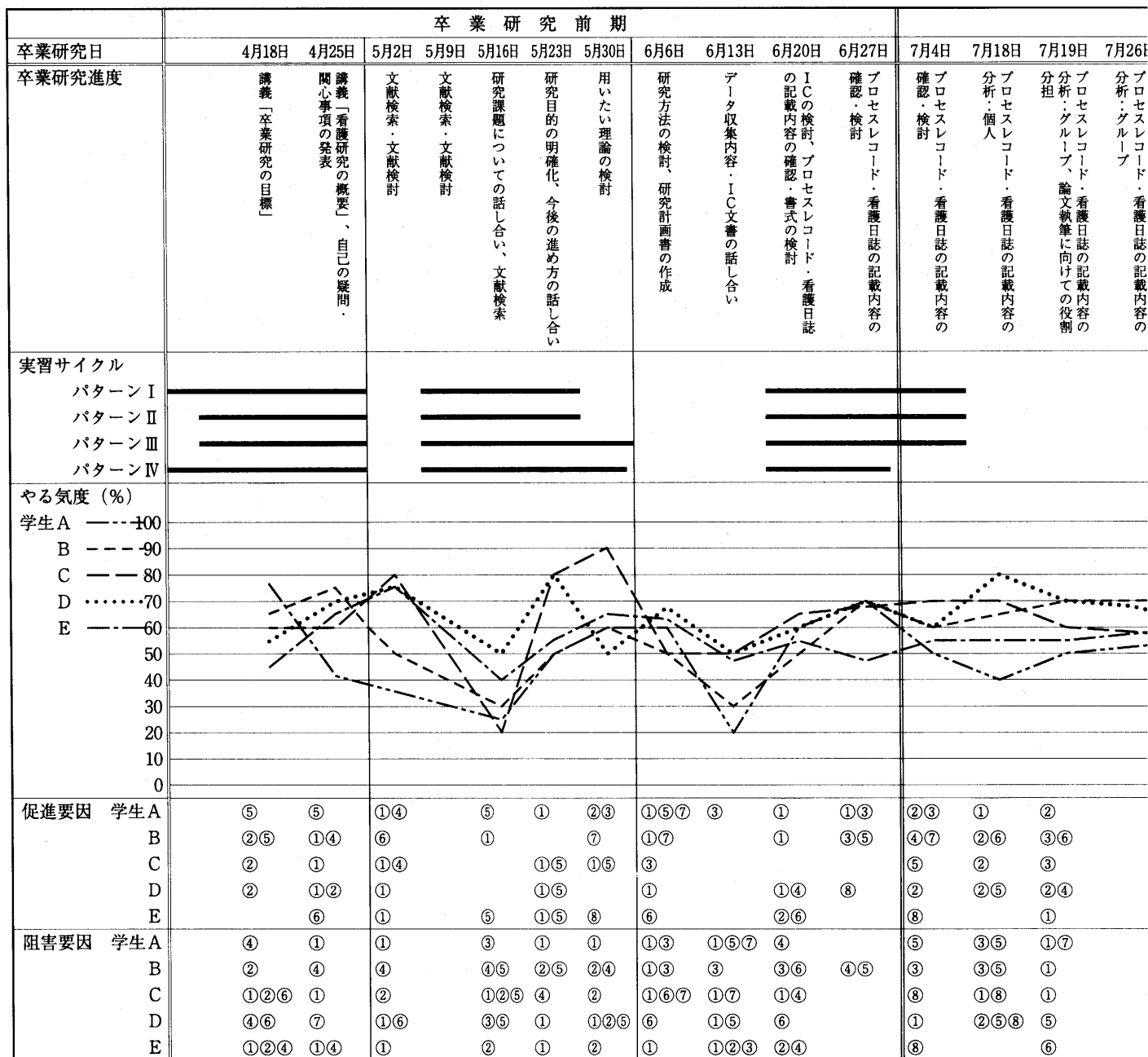


図2 卒業研究における学生の「やる気」の変化と要因

うことが出来た」といった内容があり、グループ内で意思表示や意見交換ができた場合には、学生の「やる気」は促進されたと考えられる。しかしその一方で、阻害要因の記述には、<あまり雰囲気良くない>、<部屋の空気が重い>といった内容が見受けられ、これらからは、自由に意見を交わしたり、相互に理解し合っているという場の雰囲気がないことが伺える。前期では、未だグループ内の人間関係は形成途上

にあると考えられ、グループ形式で卒業研究に取り組む際の困難さの1つが浮き彫りとなったと考えられる。

さらに、阻害要因の1つである[身体コンディション不良]の記述では、前期では、<実習記録でやり直さないといけない所があって疲れて少し眠かった>や<実習疲れて眠たい>といった臨地実習に起因する身体コンディション不良を挙げる記述が目立っていた。石桁らは、学

卒業研究中期				卒業研究後期										
8月21日	8月23日	9月5日	9月12日	9月19日	10月3日	10月10日	10月17日	10月24日	10月31日	11月7日	11月14日	11月21日	11月28日	12月5日
表の作成・検討	表の検討・再考	「はじめに」「方法」「結果」の執筆、表の検討	文章班・表作成班に分かれてのワーク	文章班・表作成班に分かれてのワーク	文章班・表作成班に分かれてのワーク	文章班・表作成班に分かれてのワーク	文章班・表作成班に分かれてのワーク	文章班・表作成班に分かれてのワーク	文章班・表作成班に分かれてのワーク	「はじめに」「考察」までの検討	文章と照らし合わせ、表の検討	文章班・表作成班に分かれてのワーク(再考)	文章班・表作成班に分かれてのワーク(再考)	論文一連の検討
		=====			=====							=====		
④	②			④⑦						⑧		③⑦		⑨
②③	⑨	③		⑦	②				④	④	②⑦	④		③
①	①	②④		③					③⑥	②	⑨	③		③⑨
	⑨	②		④	⑤				①⑧	⑧	②④	③④		④
	③⑥	③		③	①④				①⑥	⑧	②⑦	③		
①②③	①②③	①⑦			①				①②④	①③⑥⑦		①⑦		①②④
①⑦		③④		③					③⑧	⑥	②	⑦		②④⑧
②③⑥		③⑧		③					①⑥	②⑥	⑥	④⑨		②③⑧
①⑦	①②	①④⑦			⑧				①⑤	①⑥	⑤	①④⑨		②③
①②⑥	①⑨	①③④⑦		①②					①④	①⑥⑧	⑥⑨	①⑦		

- | | | | |
|--|---|---|---|
| <p>促進要因</p> <ul style="list-style-type: none"> ①卒業研究過程の理解 ②前向きな取り組み ③環境 ④コンディション ⑤グループダイナミクス | <ul style="list-style-type: none"> ⑥卒業研究内容の理解 ⑦臨地実習 ⑧教員の指導・助言 ⑨焦り | <p>阻害要因</p> <ul style="list-style-type: none"> ①身体コンディション不良 ②卒業研究過程のつまづき ③関心の転化 ④臨地実習 ⑤グループダイナミクス | <ul style="list-style-type: none"> ⑥環境 ⑦気分がのらない ⑧取り組みの停滞 ⑨パソコンの活用 |
|--|---|---|---|

生の体調とやる気との関連性は高い¹⁸⁾，と指摘しており，この学生達においても，体調の良し悪しと「やる気」との関連が示唆された。また，「臨地実習」の記述では，＜卒研のことを常に考えて実習しているから余計に実習が疲れる＞というように，卒業研究と臨地実習とが同時進行することによる疲労感が，相互に影響し合うことを率直に述べる内容が見受けられた。山下は，臨地実習は学生にとって新たな体験として

精神的緊張負荷への影響が高い¹⁹⁾，と報告している。研究を初めて学ぶ学生にとって，この2つが同時進行する学習は，心身の負担の一因になることが推測され，学生の「やる気」に影響を与えるものと考えられた。

以上より，卒業研究前期では，学生は，卒業研究過程の理解とつまづきを繰り返し，かつ，その時々で感じるグループダイナミクスの影響を受け，さらに身体コンディション不良も

加わり、学生の「やる気」は不安定であったと考えられた。

これらのことより、学生自身が積極的に卒業研究に取り組むには、前期では、学生達が実際に取り組んでいく事柄や内容を具体的にイメージできる指導が必要と考えられ、そのことが学生の「やる気」を喚起し、その後の「やる気」につながる鍵になるのではないかと推察された。具体的には、導入講義や、研究過程一連を知ることができる文献検討の段階で、学生のもつ疑問や課題の解決に役立つ文献を確実に検索させ、十分に読み込みをさせること、学生間で何をどのように理解したのかお互いに表出させ、意見交換させること、そしてその上で、今後の研究過程の見通しをつけさせることが重要だと考えられた。その際、グループ内の意見交換に影響する[グループダイナミクス]では、それぞれの学生が、安心して本音で話せる場作りと、何でも話せる関係作りができるように、教員が関わる必要があると考えられた。これに関して、小山は、活動の開始にあたっては、グループが程よく寛いだ雰囲気になるような教師の言葉かけが必要であり、何を発言してもよいのだという安心感を与えることは、自由で活発な意見交換を促進することにつながる²⁰⁾と述べている。卒業研究前期の教員の関わりでは、グループの雰囲気作りと安心感の確保が重要である、と考えられた。そして、これらを通して、学生自身が研究課題を明確化、具体化し、今後同じ方向で進んでいけるようグループ内の認識を一致させることが、「やる気」を促進させる指導上の手がかりだと考えられた。

2. 卒業研究中期の学生の「やる気」の変化と要因

中盤の7～9月は、「やる気」グラフは、高低差が小さく直線型であり、学生の「やる気」度は安定していたと考えられた。

この時期の要因の現れ方の特徴は、促進要因では、[前向きな取り組み]が多いこと、阻害要因では、[関心の転化]が多く、[臨地実習]が少ないことである。また、[身体コンディション不良]は前期と同様、多く挙げられていた。

卒業研究中期では夏期休暇をはさむため、[臨地実習]の[インターバル期間]となり、[実習疲れ]や[実習記録に追われる]ことがないため、学生には[体力的ゆとり]や[精神的ゆとり]が生まれると考えられる。このため、卒業研究に向けての[事前学習を充実]させ、[卒業研究を進ませ、見通しをつけよう]と、[前向きに取り組め]るものと考えられた。

また、卒業研究進捗では、学生が自分達で決定した役割分担により、文章班、表作成班に分かれて作業を進めている。下山は、グループが何らかの目的に向かって活動し始めるとグループ内の各々に役割が分担され、その役割を果たすことが要求されるため、個々の中に責任感と協調性が育ってくる、と述べている²¹⁾。この学生達も同様に、各班に分かれて作業を開始したことにより、グループ内での自己の役割が明確になり自覚され、自己の役割を果たそうとする責任とグループに帰属する気持ちが芽生え、「やる気」度が安定したのではないかと推察される。また、学生達は収集したデータの分析を行い、これまで形に表せていなかった自分の思考を目に見える図表や文章に変えていくという実際的な活動過程を通して、卒業研究が進んでいる、という実感を手応えたのではないかと推察される。津島は、自ら調べ書きまとめる作業では苦勞を伴うが、学生には「やれた」という充実感があり、この充実感に導ける教員の援助が重要であると述べている²²⁾。このことより、卒業研究中期では、教員は、前期には未だ形に表せていなかった思考を形あるものに変えていけるように学生に関わることが、学生の「やる気」を促進するものと考えられた。

しかしその一方で、この時期は、<就職試験が気になる>、<国試模試が近づき、勉強がしたい>といった進路に関する[関心の転化]が起こり易い時期であることが明らかになった。これらは来春卒業を控える看護系短期大学3年次生に起因する事柄である。中期には夏期休暇をはさむとはいえ、学生達は、現実的には、卒業研究のみに集中できる状況には置かれていないことが伺えた。これに対して教員は、学生の卒業研究への取り組み、就職活動、看護師国家試

験模試対策の3者のバランスが取れるよう、学生の思いに対して理解を示し、具体的な配慮をすることも必要な関わりであろうと考えられた。

3. 卒業研究後期の学生の「やる気」の変化と要因

後期の3ヶ月は、「やる気」グラフでは、サイン・コサイン型という緩やかな山と谷が見られた。

卒業研究進捗と要因との関係では、この時期には特徴的なものは見当たらなかった。しかし、図2の促進要因を見てみると、[教員の指導・助言]の割合が他の時期に比べて大きいことが読み取れる。研究進捗では、思考内容を具現化し論文を書き上げていく段階にあり、学生達は、{論文の質を上げたい}と教員に対して、論文内容に対する{具体的なアドバイス}や{改善点の指導}を求めながら、卒業研究に積極的に取り組んだものと考えられた。

また、前期において特徴的に見られた[グループダイナミクス]は、後期においては、「やる気」の促進、阻害の双方ともに、その占める割合は減少していた。阻害要因の記述では、<やる気のない人がいる>、<他の人のやる気のなさを見た>のように、{他者の態度}が、他の学生の「やる気」に影響を与えていると読み取れる記述が少数見られた。しかし、研究進捗では、各班の作業内容を照合したり検討したりしながら、それぞれ担った役割に沿った作業の遂行を繰り返しつつ学習が進められており、学生達はそれぞれ、グループ内での自己の役割を果たそうと邁進したのと考えられた。

一方、[身体コンディション不良]は、後期においても、学生の「やる気」を阻害する要因に挙がっていた。今回の研究では、[身体コンディション不良]の原因を見極めることは、困難である。しかしながら、図2に示したように、[身体コンディション不良]は通年に渡り見られていること、また、表2によると学生の「やる気」を阻害する要因の最頻値であり、26.5%を占めていることから考えると、卒業研究と臨地実習、及び進路決定という3つの課題を背負って学ぶ看護系短期大学3年次生を対象に、学

生の「やる気」と体調との関連について、今後調査することも必要かと考えられた。

V. 結 論

1. 卒業研究における学生の「やる気」の要因
促進要因、阻害要因ともに、それぞれ9のカテゴリーと31のサブカテゴリーに分類できた。

促進要因は、[卒業研究過程の理解]、[前向きな取り組み]、[環境]、[コンディション]、[グループダイナミクス]、[卒業研究内容の理解]、[臨地実習]、[教員の指導・助言]、[焦り]であった。

阻害要因は、[身体コンディション不良]、[卒業研究過程のつまずき]、[関心の転化]、[臨地実習]、[グループダイナミクス]、[環境]、[気分がのらない]、[取り組みの停滞]、[パソコンの活用]であった。

2. 卒業研究各期からみた学生の「やる気」の要因と指導の方向性

1) 卒業研究前期では、学生の「やる気」グラフは多峰型を示し、「やる気」の促進要因は、[卒業研究過程の理解]、[グループダイナミクス]、阻害要因は、[卒業研究過程のつまずき]、[グループダイナミクス]、[身体コンディション不良]であった。指導の方向性は、文献検討を通して研究を具体的にイメージ化させること、グループ内で安心して意見交換できる人間関係を作ることである。

2) 卒業研究中期では、学生の「やる気」グラフは直線型を示し、「やる気」の促進要因は、[前向きな取り組み]、阻害要因は、[関心の転化]、[身体コンディション不良]であった。研究活動の手応えを得られるよう、思考を形のあるものに変えていける指導が重要である。

3) 卒業研究後期では、学生の「やる気」グラフは、サイン・コサイン型を示した。特徴的な促進要因は見出せなかった。また、「やる気」の阻害要因は、[身体コンディション不良]であった。この時期の効果的な指導の方向性は見出せなかった。

おわりに

本研究は、極めて限られた学生を対象としたものであり、今回得られた結果を、卒業研究を学ぶ看護系短期大学生一般に普遍化することには限界がある。また、今回活用したIGF法は、極めて主観的と言われる「やる気」を主観的に調査する方法である。従って、「やる気」グラフを各々の学生で比較し、客観性を見出すことには無理がある。

しかしながら、今回得られた学生の「やる気」の要因を活用し、特に、学生の「やる気」が多峰型を示す卒業研究前期の「やる気」度を把握し、学生が積極的に卒業研究に取り組めるよう、適切な学習支援ができる努力をしたいと考える。

また、学生の「やる気」の促進、阻害の双方に共通した要因があり、さらに構造化することが可能であったと考えられる。要因を構造化することで、より学生の「やる気」を考慮した指導方法の検討が可能と考えられ、今後の課題としたい。

尚、本研究の一部は、日本看護研究学会近畿・北陸／中国・四国地方会第15回学術集会（2002.3.香川県）にて口演発表した。

引用文献

- 1) 宮本美沙子：やる気の心理学，創元社，1981.
- 2) 昌子武司：やる気の心理学，あすなる書房，1976.
- 3) Raymond J. Wlodkowski：Motivation and Teaching, 1978. (新井邦二郎，鳥塚秀子，丹羽洋子：やる気を引き出す授業-動機づけのプランニング-，田研出版株式会社，1991.)
- 4) Edward L. Deci and Richard Flaste：WHY WE DO WHAT WE DO -The dynamics of personal autonomy-, 1995. (桜井茂男：人を伸ばす力-内発と自律のすすめ-，新曜社，1999.)
- 5) 東洋，柏木恵子：教育の心理学，有斐閣，1989.
- 6) 石桁正士，岩崎重剛：学生の体調とやる気，広島大学大学教育研究センター，64，1-45，1986.
- 7) 大阪電気通信大学教育情報研究会編：教育情報処理，パワー社，1985.
- 8) 内田宏美，荒川千登世，稲本俊：外科系臨床看護実習における「やる気」の程度とその要因，京都大学医療技術短期大学部紀要，6，45-55，1996.
- 9) 長鶴美佐子：看護学生の臨床実習における「やる気」-「やる気」を感じた状況に関与した人物とその内容の分析から-，東海大学短期大学紀要，30，61-66，1996.
- 10) 上杉純美：ある看護大学の学生を対象とした基礎看護学実習における学生のやる気の原因，愛媛県立医療技術短期大学紀要，8，161-166，1995.
- 11) 氏平美智子，島上康子，沼元千江他：臨床指導者の言動が看護学生の学習効果・意欲に及ぼす影響，第25回日本看護学会集録-看護教育-，24-26，1994.
- 12) 前掲 7)
- 13) 長崎雅子，若崎淳子：卒業研究における「やる気」の要因分析-調査と観察による検討-，島根県立看護短期大学紀要，6，87-95，2001.
- 14) 石桁正士，田中邦宏：「基礎 計測と情報」増補改訂版，パワー社，1993
- 15) 石桁正士，岩崎重剛：IGF法による学生のやる気の研究(1)，日本教育心理学会第24回総会論文集，1982.
- 16) 前掲 7)，10.
- 17) 前掲 13)
- 18) 前掲 6)
- 19) 山下香枝子：看護学生の臨床実習におけるストレス反応とストレス源及び実習評価の関連，日本看護学教育学会誌，1(1)，16-17，1991.
- 20) 小山真理子：効果的なグループ学習を促進するための教師の関わり，Quality Nursing，1(9)，23-27，1995.

21) 下山剛：学習意欲の見方・導き方，教育出版，1985.

22) 津島律：グループ学習の効果的な指導方法についての考察，看護展望，14(12)，21-25，1989.

**Factors of Nursing Students' Motivation on Graduation Study
- In the Case of Group Study -**

Atsuko WAKASAKI and Masako NAGASAKI

Abstract

By means of sampling some students of a certain nursing college as the study target and applying the IGF method, this study intends to identify and clarify factors of nursing students' "motivation" on graduation study process in group mode.

During the early phase of graduation study period, a graph of the students' "motivation" shows a multi-peak form, and the driving factors causing their motivation identified are: "understanding of graduation study process" and "group dynamics", while the inhibiting factors identified are: "false steps taken in the graduation study process", "group dynamics", and "bad physical conditions".

During the middle phase, the graph indicates a linear trend, and the driving factors identified are: "positive attitude in pursuit of study", while the inhibiting factors identified are: "change in interest" and "bad physical conditions".

During the last phase, the graph indicates a Sin and Cos expressions, and no characteristic driving factor is identified, while "bad physical conditions" is identified as an inhibiting factor.

Key words and phrases : motivation, factors, graduation study guidance, nursingstudents, group study